

<b>Title</b>	自我論と人格主体論の現象学的再考第Ⅲ部(2):社会福祉的人間観の要諦 における深化的考察
<b>Author(s)</b>	牛津, 信忠
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢, 第 27 巻第 2 号,2015:101 -125
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5219">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5219</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

〈原著論文〉

## 自我論と人格主体論の現象学的再考 第Ⅲ部(2)

——社会福祉的人間観の要諦における深化的考察——

牛 津 信 忠

### 抄 録

総じて第Ⅲ部では、集約的に自我と人格の相互包摂と主体化に向かう志向意識の展開を福祉的現実に沿って論じている。それにより、自我と人格とが位相的に連続してトポス形成に至る福祉論が明らかにされる。

第10章では、対人社会福祉や社会政策(英国)の議論を、理念型の領域においてではあるが、より具体性をもって展開していく。それを通じて、間主観性の段階性、すなわち自我～人格主体、さらには人格の高度化による秘奥世界への道を確認し、自我と人格の相互包摂的な志向動向を明らかにする。

最後に、結章として、これまでの議論を踏まえて、人間世界における本質的な場としてのトポスの形成、および福祉的人格主体論に関する総括理解がなされる。それによって、エンパワーやリカバー等を通じて、本質への帰還に進む主体性の本姿が再確認される。

キーワード：エンパワー、リカバー、統合性、連続性、間主観性、トポス

第Ⅲ部 相互包摂と志向意識の展開 ——トポス形成から展開へ

第8章 人格主体と自我の相互性における場の構築——相互浸透から高揚へ

第9章 社会福祉的な場の形成とトポス論——自我から始まる主体化の位相的な条件設定

以上は論叢前号(27号第1巻)に掲載済み

第10章 社会福祉的人間観——間主観性の段階性(自我～人格主体～秘奥世界へ)

結章 福祉的人格主体論——エンパワーからリカバーへと進む主体

### 第Ⅲ部 相互包摂と志向意識の展開 ——トポス形成から展開へ(2)

#### 第10章 社会福祉の人間観——間主観性の段階性（自我～人格主体～秘奥世界へ）

福祉の現状においては、制度的バリアフリー、物理的バリアフリー、感覚のバリアフリー、包括的には自我的存在および精神の人格的段階性に沿うバリアフリーが進行し、社会的存在としての人間の相互的包摂（inclusion）が可能となりまた徹底される道が探られ、その現実化も部分的ながら進んでいる。加えて存在の内実においては、個的生活の志向性に応じた真のエンパワーからリカバー（主体的連続性への復帰）に向かう道、さらには、その道において自我主体から人格主体への歩みが辿られ、さらなる前方には秘奥人格への道（シェーラー, M.）を辿る方向性がある。そのプロセスにおいて自我主体と人格主体さらに秘奥世界の存在が相互包摂的に、かつ主体的動態の強化のもとに存立する。

ところで、現象学という本質還元ないし本質回帰の道に立つ思想上の試みは、位相的現実を前提に、既述してきた領域に限ってみてゆくと、自我から人格へ至る間主観性の究明という道を辿っていく時により明瞭になる。社会福祉の実践は人間存在の本質的開放性を持つという特質故に、この現象学的本質回帰の道に立たねば成立しえない。

したがってそこに絶えずなければならない志向意識こそが現状の起点であるし、またその志向意識内にある矛盾的統一としての統合性という作用前提が志向の原点にある。この原点なくして志向そのものが始動しないということ、即ち位置づけのない志向は紆余曲折するのみであり、これを通徹の軌道に乗せる基軸が無ければならない。その方向付けを軸芯としながら、そのもとで試行錯誤がなされていく。それが人間における解放性のなかの志向の本源である。そうした本源のもとにあって、包摂性の形而下の自我世界から形而上を超え出ていく（統合作用たる）人格性の次元への道程が成立していく、人格性の次元は絶えず超え出る以前における自我的（特性ないし個性とも言える）人格性の次元に内包されているかに見えるが、それに対しては、前方の対象化されない無限の世界に包摂された統合性の基軸に沿って前方からの包摂の実態化が進んでいく。それは通徹状況のなかで相互包摂という形態を経ながら時々刻々のなかで目に映じることはなくとも前方へ向う作用状況を形作っていく。

この章では、第7章に示された人格主体間の階層性と各段階の相互性を交えながら内的及び階層間におけるプロセス内的間主観状況をでき得る限り社会福祉の現実具体情况に照らしながら述べていく。その具体の中で社会福祉における人間観を再確認しながらさらに明らかにしていき、それが生活問題解決のために有効であることを分かりやすく工夫を凝らして述べてゆきたい。特に心情の階層性内における人格主体の作用力に参与できる条件設定としての「潜在能力説」を重視し、それによるエンパワーが、自我を超えて人格へと帰還するという意味におけるリカバーへの道であるこ

とをこの段階で明確に主張する。またこの章の論述によって間主観という現象学的本質を把握する方途の人格主体論にも及ぶ深められた確立をも試みる。

さて、はじめに、相互主体的生<sup>せい</sup>：包み込み合う存在性について自我～人格主体～秘奥世界へと進む間主観性の段階的高揚という観点から相互包摂<sup>せい</sup>ということを再度確認していくことにする。

この視点に基づき問うときに、間主観的トポス論の道が開かれていく。われわれがここに把握する「場」とは、相互に主体性を保持しながら或いは主体性へと近接しながら、他を包み込み合う或いは他を包摂しようとする、という横の領域の間主観的な作用が縦の間主観的段階に添って縦と横の相互性を展開していくという構図を持つ。それが人間の主体的な生の展開そのものである。それぞれの段階ないし次元において、包み込みの核として包摂体の全体に関係性を保持するのが「トポス」である。それは統合性そのものであるとともに、それが影響を及ぼす次元（場）をたどって包摂性の密度と広がりを増してゆく。トポスとは、そうした核としての場と表現されていく。このことを以下においてより詳細にみていくことにしよう。

福祉論として総括的な理解を手始めに、そのなかにおける技術論的側面、政策論的側面を抽出する。さらに技術論の具体として展開、さらに政策論の具体として展開をしていく。政策論においては体制論的理解の必須について触れる。

さて先に述べたように、技術論かつ政策論を問わず、自我論上の状態を越えて人格的世界に進まねば人間における志向性は、段階的にせよ完結していかないものであるがゆえに、福祉論上で問う限りにおいて福祉目的行為はそれに向かう態様をすでに現状況に内在させている。このいま内在し先に実在する連続の有様を通底的状況の一般的現実性へ至る道として明らかにしていく。そのために福祉的援助の技術上の具体における内実を用いて解明を進めていくことにする。

まず支援技術と政策領域との関わりをソーシャルポリシー内の議論をベースにして問うておく。チャピン (Chapin, R. K.) は政策論上の見地から、ストレンクス・パースペクティブとして技術と政策の関わり論を取り上げ、それは社会的諸問題が発生する広範な環境の中に存在するニーズに対するバリアと同様に、強さ、目標、個々人の諸資源、またそこに生きるコミュニティを検証することを要するという。この観点には、技術的視座と政策的視座が同時に存立している。ストレンクスを根底から支えるためにこうした上述検証に即した諸事を重視し、ストレンクスを支える技術上の手段として位置づけるのである。チャピンはこのように、個的範疇とその内的ニーズに限られるかに見えるストレンクスを、そのための条件を問うことによって政策領域と関連づけ、さらに社会条件に深く関わる領域へと視座を広げることのできる位置にまで到達させようとしている。このように強さないし力の条件という形でプロセスを問うというあり方を徹底させていくことにより、言葉の上で力や強さという結果重視に誤解されがちなこの表現を支援上の作用条件を問うことを容易に

するエンパワーないしエンパワメントという志向途上の状態と緊密な関係を意味上に形作り、それに対応する支援のあり方(方途)を導き出していくことを可能にしている<sup>(1)</sup>。

さらにチャピンは問題対応のアプローチ(以下Pとして表示)と上記のストレングスをベースとしたアプローチ(以下Sとして表示)を比較しながら、より一層その条件設定的性格と問題に影響を与える社会条件(制度条件を含み)との関連を明らかにしている。両者のポイントの比較における検討を通じてストレングスに基礎をおくアプローチの特性と有効性に焦点を当てていきたい<sup>(2)</sup>。

- 1) Pにおいては問題状況が先んじてある。その状況は修正を施されるべき問題そのものである。Sにおいては、まず、クライアントとの関係性におけるニーズ、目標、あるいはバリアがある。それを基本的ニーズやニーズ関係的なバリアへの対応という形で、クライアントのゴール明確化のため役立つ。
- 2) Pにおいては、問題、原因、また結果を分析する。それに対し、Sでは施策上の選択肢をクライアントとのパートナーシップの中で形にしていこうとする。すなわち目標到達にあたってのバリアをクライアント(その強さ)によって、また実践的なプログラムを通じて克服していく方途を明らかにしようとする。
- 3) Pでは権利主張への公的関与を告知していく。Sでは要求は自己決定の権利および社会的公正によって基底づけられる。
- 4) Pでは施策のゴールに関してそれに向かう施策上の開発が懸案事項としてある。Sでは、クライアントとのパートナーシップを前提にして、ゴールへの到達を目指し、クライアント個々のための好機や必要とされる資源を明確化していくことが重視される。そのためにサービス利用者相互の協同による施策的ゴールの形成を重んじる。
- 5) Pにおいては、構築された合意による施策上のゴールを正当化する。Sでは、関係する人々の納得の上での合意をベースに施策ゴールを正当化していく。
- 6) 施策やプログラムを開発し実施することにPでは重きを置く。Sにおいては、クライアントとのパートナーシップがまず重視され、それに基づいて施策プログラムが開発、実施される。プログラムデザインは利用者間の協同によって告知され、実施は利用者を包み込んでなされる。
- 7) 政策、プログラム効果の評価を重視するPに対し、Sはクライアントとのパートナーシップの結果を重視し、またSにおいてはクライアントの成果を強調、さらに施策改善を目指しクライアントにフィードバックすることを重んじる。

このようにみえてくるとストレングス・アプローチは、従来のエンパワメント・アプローチと緊密に関連することがわかってくる。著者は両者の関連に就いて次のように述べている。

「クライアントの動的状態の改善を実行していくことにより、その力の状況の改善を図り、その結

果としてエンパワーを可能にしていく」ことであるとして両者の関係を理解することができる。

まさにストレンクス・アプローチと名付けられた方途は、ストレンクスというクライアントの問題解決の強さにとどまらず、それ以前の内的な力動性に目を向けており、またそれが生み出す力ある状態をも内包しており、はじめにあり、予測される結果においてある状態をパートナーシップをもって目指すアプローチであるといえることができる。この動的に内奥で働く作用そのものは、われわれがこれまでも重要視してきたエンパワメントであるといえることができるであろう。すなわち、こうした理解の元で内なる力の発揚とその作用態様をとらえることができる。さらに著者曰く、以下簡潔化して述べると、ストレンクス・アプローチは、他のエンパワメントをベースにした人への支援的な戦略と同様に、クライアントの生活にさらなる力を生み出していくような支援的技術を構築しようとする。それはクライアントの生活に影響を及ぼすようにその人に関与し、真に力を発揮していけるような明確な機会を作り、潜在的な能力を目覚めさせ個々人の再出発を可能にしていく<sup>(3)</sup>。

このようにエンパワメントとの関係を深く持つストレンクス・アプローチは、いうなればその施策上の構成体の作用としてエンパワーとの関係性を密に持つことによって成立する。ストレンクスは、力、強さとして自我上の操作の対象でありうる、それは上に述べたようにクライアントの現在の強さの状況として評価対象になりうるし、さらにアプローチ施策の組上げにおいても対象化され行為遂行の手がかりとなる。その対応の結果そこに形成された強さも、対象化され自我のうちに見いだすことのできる内容を形作る。しかしそこに作用する作用自体は対象化され得ない。それは揺蕩(たゆた)いの内にあり、ただそこに把握できるのはエンパワーされる作用の程度に応じた姿のみであり、その一点をあるいは数点を取り上げることができたとしたならば、それはエンパワーの現状としてのストレンクス状態とのみ表現できる自我状況であるといえることができる。

この段階で、われわれの視点からエンパワメントに極めて類似するシェーラー、M.の「何ものかへのすべての努力のうちにあるもの」についての認識に言及しておこう。彼は、この努力のうちに実践的動機付けともみえるがそれとは異なる本源的「情緒的要素」を見いだしている。全ての志向的努力には「何らかの価値感得が、努力の像要素あるいは意義要素を基づけつつ入り込む」。これは「通常実践的動機付けと呼ばれる」。「全ての動機付けは体験される因果性である」。しかし「努力と意欲が言わばそこから現れ出るその都度の感情状態は、(そうした)動機付けとは異なる」。それは「物理的な『衝撃(背後の力)』の現象を自分のうちに含む関係」である。それをシェーラーは「努力の源泉」「ばね」と言う役割を有する「情緒的要素」として認識している<sup>(4)</sup>。

すなわち、われわれがここで取り上げるエンパワメントとは、シェーラーによると、この価値感得を伴う動機付けとは異なるその基底といえるような「源泉」であると理解される。あるいはむしろ源泉の力動性を表現して「バネ」と認識される「情緒的要素」といえる。さらには、それと共に遂行されていく動機付けとの連動状況の広がりとも理解できるであろう。

そうした自我的状況、およびその躍動的「衝撃」から次第に人格的本源的存立へと帰還する道がたどられる。この議論の推移を次にみておくことにする。

ストレンクス・パースペクティブとエンパワメント理論とは切っても切り離すことのできない緊密な関係性がある。それは紛争に関する理論に基礎を持つともいわれる。まさに紛争理論は個人的集団的に力を拡大し利益を最大限にせんとする闘争のあり方として集約され社会的政治的変動を齎そうとする目的を持つ。ストレンクスに基礎を持つまたエンパワメントに発する改革はどちらもクライアントと環境の強さや戦略に集約され、それは具体化すると同一環境内の個々の生活者に関わる知識や技能についての教育や、自助、社会的権利擁護ネットワーク、社会運動を含み、クライアントを支援し彼ら自身の生活を強めていこうとする。両方とも、生活における決定のすべての局面におけるクライアントの参加を強く支援するアプローチであるということが出来る。さらに両方とも戦略的にソーシャルワーカーとクライアントとの平等な関係性を齎そうとする方途であるといえる。このような記述に読み取ることが出来るように、エンパワメントとストレンクスとは「戦略的に」という表現にも明らかであるように、政治、政策次元においてクライアントに視点を置きその主体性を尊重していくあり方を運動的に形成せんとする方途、われわれにとっては福祉上の要にある方途である。エンパワメントもストレンクスという用語に結合することによって政策上の位置を現実化していくことが出来る。ストレンクスにとってエンパワメントはその状態の具体化、まさに実質的作用化を形作るために重要な内容定立をしてくれる。しかしこのエンパワメントとも、さらにその作用内容を本質に至って問われるときに、さらなる問いかけとそれへの応答を要するのである。それに応えることが出来るのがリカバリー・アプローチに他ならない<sup>(5)</sup>。

リカバリーという用語から類推すると、回復する、快復する、元に戻るといった意味が一般的であろうが、われわれはこの用語の意味を「本源ないし本質への回帰、ないし帰還」と理解しておく。それもその人にとっての帰還であり、その人の内的志向のエンパワーであり、その人のそうした意味での主体的志向の発揚であるとして理解する。それはシェラーに基づくわれわれの理解からすると、最終的には人格主体への帰還として集約することができる。

ところで福祉領域の現況において、この用語はどのように理解されているのであろうか。

リカバリー・アプローチ<sup>(6)</sup>の創設者とされるアンソニー (Anthony, W.) は、精神保健上の問題からのリカバーを損傷、機能不全、障害、また不利を伴っているとしてもそれは受け入れうることであると述べている。つまりどのような困難からのリカバーでも、生じ来たった事柄を否定することなく、良きリカバーとは人そのものが自ら変わることだということである。確かにリカバリーという用語は治癒に限定されるものではない。この著者の場合は精神保健に限定した議論がなされているのであるが、そうした枠を越えても、それは妥当性を持つであろう。精神的身体的な困難状況を抱える人の否定的状況を乗り越えていこうとする人間的プロセスの「現存統そのもの」としてそれを理解できる<sup>(7)</sup>。

ラップやゴッシャらは、彼らの著作において、精神保健サービスはリカバリーに明確な出発点を持つか、あるいは精神医学的な障害を持つ人々への抑圧のサイクルが持続するようなものに終わるかどちらかである、と主張している。リカバリーというのは病的症状や不利な条件からわれわれを自由にし、人間の潜在性や福祉へとわれわれを導くものである、という。それはまた退いていくよりむしろ社会的にとともにあるという方向にわれわれを突き動かし、障壁よりむしろ可能性をみるようにわれわれを誘う。リカバリーを集約すると、人のそれぞれの個性を強化することなのである、と。さらにディーガン (Deegan, P. E.) を引き、決して線型的に直線をもって進行するのではなく、曲折を辿るプロセスであると共に、そこには確実に結果が残されていくことも主張されている。次に彼らはリジウェイ (Ridgway) の見解を参照している。それによって上述の方向性が一層強化された形で理解できる<sup>(8)</sup>。

リジウェイいわく、リカバーとは絶望の後の希望への目覚めである、人生の関与や積極的参加のあきらめから動的に前に進むことである、受け身的な適応から積極的対応へと進むことである、精神障害を持つ人として一個人をみるのではなく、自己としての肯定的な意識を取り戻していくその人としていく、また意味や目的に対する阻害からの離脱をなしているとする。まさにそのプロセスは、自己意識、自助の責任制また精神保健システムを超え出た生活を再創造していくことに他ならない。リカバー的な対応はそれのみで作用化されることはない。支援とパートナーシップを必要とする。ここに参照しているリカバーの用語解題はそのプロセスをわれわれにわかり易く説いてくれている。次に彼らを取り上げるポウエル (Powell) によるリカバリーの5段階説はきわめて構造的にそのプロセスをわれわれの前に提示してくれる、といえる。第一段階で個人は病の力に打ちのめされている。次なる段階では、その個人が障害状況へと落ち込むように病がその人を占有し生活ないし人生を制限されたものと認識してしまう。第3段階では、その人は病による障害という拘束力に疑念を抱き自身のおかれた状況に問いを発するようになる。第4の段階では、病による障害状況に行動的な挑戦を始めるようになり、被雇用者、学友、教会員のような役割の増大を受け入れるようになる<sup>(9)</sup>。最終段階では、人が病を人生への挑戦としてとらえ直し、病による拘束を乗り越え、人生の統御主体となっていくというプロセスを辿る。このプロセスは、他の論者の議論としても触れたように、線型的な直線ではなく、またこの段階が全てに段階的に当てはまるという定型化したものでないことは言うまでもない。しかし、この議論はリカバーのプロセスの概略をごく簡単なながらも、流れのポイントに限定しながら指し示してくれる役割を果たしてくれている<sup>(10)</sup>。

したがってリカバリーとはその人の置かれた状況次第でケースバイケースなのであるが、そうはいっても、リカバリー・アプローチには、そこに存在する共通の概念あるいは要素を見いだすことができる。列挙すると、希望、エンパワメント、必要とされる情報や知識、プロセスの各時点で不可欠な支援、雇用や社会活動、医療対応、自助行為、スピリチュアリティ、ユーモア、熱意などがある<sup>(11)</sup>。

このようにリカバーとは、内なる力を発揚していくプロセスであり、それは、各様の条件設定を伴いながら、その人の主体力の強化という潜在力への志向化の作用を促していくことを意味するのである。それは到達点があるという限界性の想定を超えて人格主体への志向が続く、まさにプロセスの作用に他ならない。到達点と見える一点一点におけるストレングスという形で自我的様相を見て取ることができるが、その揺蕩う側面と志向していく側面は、主体化への途、まさに客体からの離脱作用の継続に他ならない。

上述のストレングスモデルにおけるリカバリーにも、さらなる記述にいわれているように、自己意識という客体的状況の意識化のなかにおける病状として現障害状況を捉えてしまい、人生の一兆候という経験的様相としてとらえることをなし得なくなる。むしろリカバリーというのは、人のその障害状況を位置づけていくことであろう。これはまさにわれわれの表現で言うならば、客体的側面を客観視すると共に、その上位統御力でその状況を人として捉えることを意味している。上位の統御力としてそこに作用するのはその個人の自我を超え出た人格であり、厳密にいうと人格主体である。

このモデルの提示者もさらに、人としてのコントロールの力や人としての目的、また責任的な役割を持ち初期的ながらも達成していくこと、一個人たる存在性という要素をもリカバリーの要素として指摘している。こうしたこと全てが自我上の個人を超え出てそれを統御できる人格主体の個としての存在性の内なる発揚として理解することのできる内容である。

ところで、「ストレングスモデル」においては、リカバリーの心理学的な結果状況として、個人的自己覚知と心理状態との関係が問われている。それがどのような内容を含むのかを問うと、希望を持つ、自己効力感を持つ、自己尊重できる、関係性の感情を持てる、最後にエンパワメントが取り上げられ、これが第一のリカバリー構成要素とされる。第二の構成要素は、緊密にコミュニティの統合性と関わる。人は場のなかに生きる存在である。その場は、その個人に家庭をまた仕事を齎し、それが人に満足や所得を齎してくれる。さらにその場は人に豊かな社会的ネットワークを齎してくれる。さらにまた他の人への貢献を可能にしてくれる。そうしたものを喪失すると、そこには精神的崩壊が生じる危険が生じることになる<sup>(12)</sup>。こうした議論は近年の地域福祉の議論を彷彿とさせる。コミュニティの緊密な絆や寄り添いが可能な関係性によって人間の個的存在が支えられるという議論への回帰である。かつてエッチオーニ (Etzioni, A.) が指摘したように、コミュニティは精神的安定を支え、その欠如は障害率を高める。同時的に諸種の社会資源の必須に関する議論をも成さねばならないが、ここでは関係性の議論に止める<sup>(13)</sup>。リカバリーの必要条件に関するこの議論と共に、われわれは事前にベルマン (Velleman, R.) やデイビス (Davis, E.) 等によるリカバリーの共通概念の要素にも言及した (注7)。総じて共通項として見なしうる概念群であるということが出来る。いずれも前方志向的な力の内在および発揚に結果するプロセスとして理解することができる。しかし、再述になるが、こうしたリカバリーの必要条件を達成していく途は直線的には進行しない。

揺蕩（たゆたい）を必須とする。前述し指摘したように揺蕩いとは、いうなれば自我領域と人格領域の相互浸透という態様の、またそのなかにおける高揚・退行という方向性の交錯状況であり、非連続的連続という自我と人格両者の具体的関係状況をそのなかに見て取れるのである。客体としての自我領域が、主体としての人格領域に浸透し、その錯綜を経た高揚により人格領域で作用化されていく、また主体としての人格領域が、自我との関係において自我的人格という統合性を発揮するなかで自我領域に姿を現すことになる。上述のリカバーの諸要素とはこのプロセスにおけるプロセスゴールの顕現であるとして理解できるであろう。このようにして自我と人格各領域両者の相互浸透がなされていくのである。その相互浸透により、人格基盤とそれにも増してそれに基底づけられた自我基盤が形成されることにもなる<sup>(14)</sup>。

さらにいうと、上述のプロセスでは障碍状況のなかにある個人が、そのおかれた環境および社会経済状況にインクルードされていくプロセスとして、理解することもできる。換言すると条件としてのインクルードを必要とする。そこにおいては、リカバーのプロセスにある希望やエンパワーに象徴される前方への途に揺蕩（たゆたい）のなかにも歩み出てゆく道が、その道程の形成に関する条件設定により可能になってゆく。希望については、リカバーに関する多くの文献が取り上げている。「希望」の存在の必要性については有力な主張になっている<sup>(15)</sup>。一般に回復力ないし状況を乗り越える力が、人の生活環境がストレスや拘束で充満している時でさえも、柔軟性や積極的適応の経験余地を残す能力においてその存在が証明されている<sup>(16)</sup>。ストレングスモデルにおいては、エンパワメントとは、人々が何かに向かう意志の状態であり、またクライアントや専門ワーカーが達成すべく協同する状態として捉えられている。ストレングスモデルはそれ自身としては一定のプロセスを具体化する方法とパースペクティブの組み合わせであると理解されている。したがって、ここでは、エンパワメントとはそうした理解に即してみると、希望に基礎づけられた「望まれた状態」という見地から解き明かされる概念ということになる<sup>(17)</sup>。

こうした前方志向性とそれへの曲折を柔軟に辿っていこうとする途上において、リカバーネットワークが形成されてゆくのであるが、同時的に、そこに形成される状態の構造と機能をリカバーネットワークとしてのコミュニティとして表現することができるであろう。

そのような条件設定の連続を希望を前提とするインクルージョンの実体化として把握することができる。そこに生きる個人は、そのインクルージョンないし包摂により、当該社会からのエクスクルード状況から離脱していくことができる。またその個人はコミュニティという意味を持つ包摂社会を同時的に包摂することができる。それにより相互包摂という状況が、すなわちわれわれが位置づけるトポスが形作られていくのである。これは単に一個人の問題にとどまることなく、集団内にあるいは集団間で生じる。まさに世界開放性の現象であるということができよう。ここにあるまさに世界開放性は個的、集团的、さらには国家的、民族的等々、といった状況内における各様の形をとるエクスクルージョンからの離脱であり、まさにインクルージョンの連続のなかに統合

性が進行していくことに他ならない。

そこにおける個的、集団的存在に対して働きかけ合う相互的な在り方のなかにエンパワーしていく内容が浮かび上がっていく。それがまさにストレングスというプロセス上の表現として捉えられるのである。また社会的にもインクルージョン的統合性の前進、即ち相互包摂の高揚が発現し、それは世界開放性を一層幅広く深いものにしていく。

われわれは、こうしたプロセスへの帰還こそが、リカバーに他ならないと理解するのである。このようなプロセスの連続は絵に書くことは容易いことである。しかしその実現のためには高いハードルを越え続けねばならない。そのために、政策次元における、さらにはそれを基底づける体制次元におけるエンパワー、ストレングス、リカバー、インクルージョンが深く問われその具体的施策化が必須となるのである。これが福祉次元の具体を実現させる条件の考察と現実との照合論理となって提示されてゆかねばならない。

われわれのいうトポスとはこうした相互包摂の実現を可能にする条件的諸要素の設定によって左右される。それは自我に働きかける条件設定であると共に、それを越え出て行く人格の統合作用の影響下において、われわれが度々用いた表現を用いると、相互に存在参与し合うことによって実現していくと理解できる。ここに相互の包摂状況の自我と人格間の関係づけ、いわば絆形成の起点があるといえる。

これを、先に用いた議論を交えながら、再度吟味検討し理解を深めていくことにしよう。

前述した議論のなかで示したように、「人間存在においては、主語的な世界、特に私(I)を中心にしてその他の主語を統括し、また述部の一般性をも包括・統括できるという自我論上の自我主体が存立する(個々においては自己肥大的な志向幻想に陥ることが多くある)」。このことについて、われわれは「存在はこれらの自我主体の拡大性向と人格主体の統合性との相互作用、間主観関係から成り立っている。これが人間の世界の実質的な位置(状況としての場)、Topos 状況それ自身である」<sup>(18)</sup>と理解してきた。自我論上のトポスの位置から見ると、それは状況を包括する核として包み込まれている全体に関係する。ここには絶えざる志向性が作用しており、それが自我存在の核となり一般性の本源が流れる「自他未分化の体験流」ないし「生(なま)の存在」「肉」を主語的存立のもとで特殊化する自我論上のトポス的状況との相互的包摂性が存続し続ける。

われわれは、自我主体に軸芯を置いてそこから世界を見ることに終始していることが多い。しかし、それは存在の底流としての流れにおいては「自他未分化の体験流」、或いは「生(なま)の、また肉の存在」に関わることによって、むしろ自我主体から解放されたときには、そこにおいて在ると信じた自我存在ではなく自己にインセプトすなわち「植え込み」による外部から訪れた体験内容によって統御されていることに気づかざるをえない。もしその自我的存立に「自他未分化の体験流」から分化された軸芯が育っているかに見えたとしても、それは過去の流れと相互的存立をなしていると見るができるのみである。さらにそこに「生(なま)の存在」とそれに関わる「分化

による特殊化された存立」との間主観が前方に開かれることによって可能となる将来への志向性の連続を加味して人間存在を捉えるならば、過去からの流れと無数の間主観的また志向的關係を保持しながら、将来においてそこにあるシェーラーによって「人格」存在といわれる階層状に現出する主体そのものとの間主観が縦・横という無数の織り目の様相となって存在していくことに気づくことになるのである。

これについて仮説性を保持しながら段階的に捉えるならば、志向された個人人格の統合性の高度化プロセスと、社会的人格の統合性の高度化プロセス、次には秘奥人格における宗教的統合性の高度化へ向かうプロセスとの間主観が個々の多様性を伴って無数に描き出されていくと表現することができる。この志向の高度化は、垂直的な前方からの統合性のもとにあって相互的に成立していく。

それは、自我存在から発する志向性の人格へ向かう段階的高揚、それも試行錯誤の道をたどるが、その志向性の到りついた各段階からの統合的自己存立への働きかけそのものともいえるのである。そこにある志向性とは、その到ろうとする方向性の一点一点を志向する意識的態様として捉えることができるが、それはその一点一点の意識化と価値づけ、意識されてある内実を達成する方途とそれに添う行為とによって構成されるプロセスである。そこには、到りつく一点の価値と行為化前の意識との相互性に基づく出発点を捉えて考えるならば、一点に内在する価値と現在の意識との関係性のなかには、現段階への価値からの働きかけとも捉えることができる作用を見出すことができる。到ろうとする一点があってそこに到る現段階における条件整備を伴いつつそこへの道を築いていくのであり、それは現段階の生存が前方の一点からの働きかけを得て開かれていくという形での志向の相互的態様そのものとして描かれる構図が現出する。このように把握を進め、ここにわれわれが導き出そうとする価値としての統合性を俎上に載せるならば、前方の一点としてある統合性とそれを価値在りとする志向性は、自我存在における主体と志向されてそこにある統合性たる主体との間における、即ちそれぞれそこに看取される主体相互における間主観性として把握できることが明瞭になる。その働きかけは個の内面から発して広がってゆく。しかし、その働きかけに応じた順当な統合が果たされ続けるといふ存在の開きを客観的に受容しているわけではない。これまでの議論において絶えず示してきた両義性というファクターをここで再度想起せねばならない。この両義性は働きかけとしての統合への道の絶えざる揺らぎを、そこにおける試行錯誤、ある場合には存在の閉塞をも伴うことを告げ知らしめる。そうした態様を内包しながら、前提してきた(条件化された)開きが許容されるときに、存在の持続が同時に許容されてゆくことになる。そうした意味で存在の開きは、本質への還元により至りうる可能的(および方途的)本質である。

それは、そこに生じる働きかけによる瞬時々々の統合的包み込みが連続していくプロセスとして一面的には把握することができるが、しかし、人間相互間及び社会的存立体相互間においては、この間主観において相互に包み込み合うという関係が存在の開きが前提にされる限りに於いて可能である。それが、人間及び社会における主体的共同ないし相互主体性、まさに人間の間、社会間、さ

らなる大きさを持つ社会間等における間主観性の名に値する開放情況そのものである。

これが最も高度化した次元とされる秘奥人格の次元においては、シェーラーに依拠していうと、愛に開かれた人格として、愛の包摂という下部の存立体を包み込む働きと、包み込まれる存在のその受容力の高度化の程度に応じて包み込む力を増すという形で、間主観性が成立していくことになる。人間における間主観を通じての包み込む主体への参与は、その「自我的固執」故の限界情況に絶えず直面し続けるものの、その高度化は対人また対社会への主体的参与を高揚させ、同時に間主観性の高揚をもたらすということができよう。この動的状況とその考察は、単なる形而上学として退けられるような把握ではなく、間主観性の本質への道程である。

こうして描き出される間主観性の広がりやわれわれはトポス状況（核としての場の展開状況）と捉えることができる。それは、相互に包み込む、また包み込まれる関係性の広がりやのエッセンスである。それは、単なる状況の広がりという様態、即ち一般としての述語的広がりとしての様態を呈しているかに見える。しかし未分化な状況から、次第に分化し、自我とさらにはそれを統括する人格を働きとして受け止めることが可能となった存在の、その分化がもたらした特性を個性として内包する特殊、即ち主語的存立体が、自我としての主体覚知という情況を経て、各層の統合（人格）主体に包摂されながら、自らもそこに存在参与していくことを可能としていく。これが対人的さらに対社会的存立へと広がりを持ち、述語的態様と、主語的なその特殊体が無数の間を生じさせていくことになる。

このように見ていくときに、われわれは、述語的態様のみが世界を形成するのではなく、そこに特殊として立ち現れる数多の主語が、述語世界との関わりの中で世界を創っていくことに気づくことになる。その主語的存立体は、前述したように、自我論上の存在であり、それは「我」と「汝」と呼ばれるような「自我を越えた存在」ではない。したがって、ここに生じる特殊化は、自我的中心という自我論上の主体に終始する。この主体は未開放状態にある。

したがって対象化されえないシェーラー流の主体＝人格主体による包摂に応答しそれに存在参与するという開放状態がもたらされることがなければ、それは特殊化と特殊化による個々の絶対視、いくなれば人間の世界における（偶像的）神々の争いをもたらすのみとなる。それでは述語的世界の広がりやを重視し、そこに包摂されながら生じるまた存立する主語的特殊を「従」と見るとすると、そこにある意識の開きのなかに生じる志向性の本質とその役割を軽視してしまうことになる。

ここで福祉論上の情況を例にとると、上述してきた状況は、自我の錯綜に終始し、様態としての流れはあっても絶えず個人的、社会的さらに広がりを持った向上を閉じることに繋がる、という事態を齎すことに気づかされるのである。それは、さらなる福祉論への近接をもっていうならば、閉鎖から閉塞状況へと陥ることを余儀なくされ、Well-beingへの道をたどり続けるという創造性への道を失うという結末を迎えるのみとなってしまふ。

主語と述語は両義性を持つ存立体であり、その両者がそれぞれ特殊と一般という特性を持ち、相

互に開かれた関係性を保持していくときに、人間、社会、世界の存在がその営みに志向性を持たせ存続していくことができる。そのプロセスでは特殊化の行き過ぎという事態も多生じるものの、その是正が一般への帰還を持って可能となり、また特殊と見られた内実が一般の位置を取得するということもある。このようにして、相互の関係性ないし志向的間主観が、各様の主語に発し、述語に包摂されながらも、そこに生じる志向性とその連続によって生み出されていく。

この背後にある論理が、ここにおいて、すでに明瞭となっている。それが上述してきた、人格主体の働きによる各層からの統合性とそれへの存在参与という志向性の論理である。人格の開きが各層の人格において問題にされることは、すでに述べてきたが、この開きを機能させるのは内なる志向性であり、これは前方からの統合性の作用力を前提にはじめて機能することが可能になる。その潜在性を引き出すのは、前方にある「無」というようなしかも絶対無というような（そこに到ることが創造性の極致とされるならばなおさらのこと）ものではなく、自我主体からの離脱と統合性への存在参与である。これが主語的特殊化、主語的個性を随伴させながらも一般化する道程であり、特殊化による弊害状況を乗り越え、述語の一般性というように表現される世界内状況を、自己存在の特殊化を通じて個性的な開放によって開花させる（創造的）道筋に他ならない。たしかに、絶対無を心に宿すことによって、あるいは、述語と主語の究極に自己存在を浸透させ、自己滅却に近づくことによって、無限に開かれた自己存在を心に宿すことは一つの悟りの境地（創造の極致）への道を形作るであろう。この段階の絶対無とは、想念上の宗教的態度の設定に他ならない。しかし、これとは異なる、前方の究極に於いて秘奥人格という人間存在の人格上の参与的存立を働きかけとして捉える歩みのプロセスと、西田の言う無へのプロセスは、まったく違う道筋である。そのように到達上の絶対不可と可能性の存在という違いはあれ、実は現にそこにある自己の内的態様の無としての存立条件設定と高次人格への存在参与によってもたらされる内的態様はその把握内容においては、両者とも近接する面を持つのである<sup>(49)</sup>。

こうした上述してきた議論を福祉論、特に福祉実践上のプロセスの議論に照らし見ていくときに、またその援助技術の実践という具体的に照合するときに、明瞭に以下のようなことを指摘していくことができる。

ワーカー／クライアント関係という一般的援助技術の関係を例に見ておくと、両者の関わりは上述した議論の流れの下に捉えるならば、支援者と生活問題を抱えた人という形態化した類別を越える、ないしその類別の否定から始まる、或いは存在の本源にある相互性に帰ることがなければならない、ということが出来る。両者による協働としての志向をそれぞれの立場において探るという条件形成においては、いくつかの専門技術的な対応が必要であろうが、それも上述してきたような開きに基づく相互主体性によって、相互の人格的協働を探る道に立つときに、人間を閉塞状況に放置する状況（われわれはこれを「物化的対象化」とも呼称した）が防がれ、かえって包摂関係とそれを基盤とした高揚する人格への参与が達成されていくことになる。こうした高揚する統合性への段

階的積み重ねの各状況をわれわれは社会福祉におけるトポス状況ないし全体としてのトポスと呼ぶことができる。それは相互的包摂の場であり、まさにそうした場は多くの人々に開かれ、人々の訪れを待つ地域の日常の中に備えられることが求められる。「ソーシャルワーク協働の思想——“クリネー”から“トポス”へ」という柏木昭の思想は、この具体をよく表現している<sup>(20)</sup>。

ところで、以上述べてきたのは確実に価値作用を前提にした議論である。述べられているのは価値に基づく倫理学上の議論ともみえる。それは、この論の脈絡にも連なる福祉価値に他ならず、そこには存在の持続的存立とその存在の Well-being が、その形態は様々であるが前提されている。したがって、この論はその価値前提に基づく、その範囲内における福祉倫理学上の議論である。この議論と現象学の本質還元との関連については前述しており繰り返さないが、場の議論と関連させながら福祉実践上の価値論について前述した議論とも関係させて少しく述べておく。そのことをこの章の最後に明示して結びに到ることにしよう。

社会福祉実践においては、その実践が展開される場として生活問題状況の存在がある、またその問題を担う人々がいる。これを述語ないし述語的一般状況とその状況が人の存在と相互的に関わる特殊状況即ち主語的状況に関する脈絡のなかで捉えることにしよう。この試みによって、問題状況という場に即して価値的態度が本質存在することがより明瞭になる。

そこでは問題およびそれに関わる全状況とその担い手が場を形成しており、その人は苦痛或いはあきらめ等という場に関わる意識状況のなかにあっても、場に飲み込まれない主語的自己を、一般状況としての場にとっては特殊という位置を何らかの形で保って存在維持をしている、或いはその状況崩壊に直面しているということもあり得よう。ソーシャルワーカーは、ここにいう場にとっての特殊に対応しながら、一般性との整合化、或いは一般性を越えて特殊を生かす道の協働者として生活上の困難に対して自立支援をしていくことになる。個においては、自我主体としての主体の芽吹きに始まり、次第に統合主体としての人格への道をたどりながら、間主観的關係性の中で、一步一步が刻まれていく。こうした行為ないし歩みは見定め、これと指さすことはできないが、統合化主体への志向的作用によって始まり、現状の苦しみ、絶望や苛立ちという述語的状況への意識的様態と密接不可分な客体状況からの離脱というプロセスが自立へ向かって可能性を持ち始める。こうした主体力への支援こそが、その人の Well-being（問題状況への援助・回復・予防といった対応から状況のさらなる良化を含む）を目ざす支援の実践に他ならない。

この福祉実践とされる行為は、生活上の困難性というニーズを持つ人或いは人々への支援という形態を持つが、それは、そのニーズへのその人或いは人々による自立的な働きかけの条件を緻密に間主観的關係のなかで築き上げていくプロセスに他ならない。それは対象化できない汝の人格との間主観的關係の持続的な遂行によって可能になっていく。こうした行為は個別支援或いは問題当事者の小集団形成を用いた支援においても、その個々の述語的情況に付着する生活上の困難をもたらす要因に対し、当事者ないし主語としての自我論的自己からの動きに発することになるが、そこか

らの道筋を辿りながらも、さらなる主体、すなわち対象化できない可能性としてのまた潜在化している主体へと歩みをたどっていく。そうした歩みは、直接的なその人への支援としての心ないし身体操作ではない。特に真の人格は、対象化できないという前記述を思い起こしてほしい。対象化し操作対象とすることにより、心・身体の物象化が始まっていくことに思い知らねばならない。それは、人格作用が作動するための条件を探る、その人の或いはその人々の歩みと共同歩調を辿りながら、条件を探り見出していく希求の行為化に過ぎない。見出し、力を取り戻し(recover)歩み始めるのはその人、或いはその集団主体に他ならない。間主観の粋を尽くした、共感に基づく条件設定の細やかさが、支援の実質化における鍵となる。これがエンパワーを作用的内容とするストレングスであり、その人と、その社会的等の本質への回帰である。ここにある福祉的内実を検分していくと、そこには、間主観関係の広がりと深まり、そうしてワーカーと問題当事者の間に包摂関係が顕現していくプロセスがある。それは包まれるものが包み込み、包み込むものが包まれるものとなる主体的包摂関係であり、これは主体的共同の実質としてのトポロジーの関係性といえる相互性である。このような関係性は既にメルロ＝ポンティによって直感され、そうした関係を内在させる存在論上の解明への糸口が開かれている。かれは、これを「均衡とか包摂などといった関係が限定できる場である位相空間は、クレーの色斑のように、すべてのものよりもっと古いと同時に『[生まれればかりの] 最初の日に』(ヘーゲル) あるものでもある存在」と表現している<sup>(21)</sup>。

われわれは、これを福祉実践上のトポス状況と表現することができる。福祉実践の地域的場が「トポス」として語られるとき、それはまさにわれわれの言うトポス状況への開拓の実質としての意味を持つ。こうした実践は確実に歩まれている<sup>(22)</sup>。この相互行為が存立する全体を、包摂され、包摂しながら切り離すことができない包摂体として理解するとき、その全体包摂内容の「核」をアリストテレス以来の場の理論という「トポス」そのものと理解することができる。

その「包摂体の核」を「状況内的主軸」ないし「主体そのもの」として理解することができ、強いていうならば、志向性の試行錯誤のなかでたどり着くことができる、プロセス上の隠れた状況における主体がトポスである。それは内なる領域を包み込み関係し、統合へと向かう、或いは統合している。またトポスは、核としての主体同士の相互性が形作る状況を伴う。主体間の包摂関係が、関係性の内部といえる状況を包摂する間主観性が関係性の個々には成立しており、それは関係性の拡大とともにさらなる拡大を遂げる。トポスは、このように絶えず現状を越えて包摂を拡大していく趨勢を持っている。人間の関係性が存在する状況においては、まさに間主観性の階層をたどる態様趨勢と同様な動きを呈するのである。

以上のことは、単にワーカーと当事者といった個々人の間や困難を抱えた小集団とワーカーとの間を例にとって述べた事柄に止まるものではない、地域社会内の問題を抱えた集団、社会集団、コミュニティ、さらに国家集団間、さらに世界へとその領域は人間の関係性の存在する状況全体に渡っ

て捉えていくことができる。マクロに視野を広げるばかりではなく、ミクロに於いても、細やかに見ていくと、述語的状況の差別様態とその中に生きる人々についても、また制度的不備に起因する問題状況のなかにまさにそれに飲み込まれて生きる人々についても、或いは職場の関係性に悩む人々についても同様なことがいえる。

前章で簡潔に示した、位相関係を想起すると、まさに人間の関係性の次元で見ていくときに、このトポス状況の中では位相幾何学的な関係性が、その根底に関主観的关系性を維持しながら動的に渦巻を見せるのである。

例示的考察の具体化を図ると、現社会状況の下では、「障害」としてしかみえないが、実は大きな能力保持者であり、角度を変えた条件設定次第では、見方が大きく変わってくる。これは、障害を障害としないノーマライゼーションによる、社会構造・機構、環境等の良化（改善・改革）によって可能となっていく。障害克服のための研究促進の中で、工学的、医学的等の発展という障害状況という現実状況と、障害者の生活に関わるギャップの存在ゆえの学的技術的発展が生じることも、直線的あるいは曲線的に関係性が見事に築かれる例が多く生じる。また重度の障害保持者であればあるほど、その高度化貢献力は大であることもいえるであろう。さらに、志向性社会の開発を助ける、ワーカーがクライアントにより成長させられる、人間的高揚が与えられる、相互包摂性の高揚により、相互的存在の安定性保持、等々……が存在する。

ここには、きわめて宗教観に富むあまりによく知られた言葉であるが、それを挿入しておきたい。それは「この子らを世の光に」という糸賀一雄の言葉である<sup>(23)</sup>。この糸賀の言葉は知的な遅滞状況の人びとを念頭に置いたものであったが、この言葉はその状況に止まらない。ワーカー・クライアント関係、さらには困難を抱える人々を取り巻く人々との全ての関係においていえることである。困難を抱える人々を世の光として、成すべき事柄を探り、それを途として照らし出す光をそこに発見していく。「困難を抱えた人々」をわれわれの行為に対する導きの光として共に生きることを求めるのが、この言葉の真意といえる。「困難を抱える人々」、この言葉は日常から非常なる事態にある人々全てに使用可能である。多くの差別、偏見にさらされている人々、今日のこの時を生きることに絶望を感じている高齢者、精神的な多くの重荷で一瞬を生きることに息苦しさを感ずる人々、いじめ暴力に悩む人々、現代の貧困問題に押しつぶされそうになっている若者たち、格差社会の世界的な広がり、に苦しみ、怒る人々等々、こうした人々すべてが本当に人として喜びを持って生きていけるような支援やあり方を作りあげていく起点として、人を見つめる視点をわれわれに告げ知らせる。人が生きづらい困難性から離脱可能なそのような環境を、人間関係を、また制度を作り上げていく。必要なことは何かをわれわれに告げ知らせる役割を、何をすればよいかをわれわれに知らせる導き手の役割をこの生活上の生きづらさという困難性に直面する人々、困難を抱えた人々が担っている。その意味でわれわれが行く途、進むべき道を照らす光の役割を担っていると考えることができる。われわれが「生きづらさを背負う人々を世の光として見つめ、そこからその人ないし

人々の生き易さを目指してなすべきことを道標（みちしるべ）として明確につかみ取り、それを実行していくことが原点となっはじめて、困難性の中にある人々を光とする支援のあり方が真に現実化していくことになる。それはまさのその人々への存在参与であり、共遂行である。そうした存在参与の well-being を求めるあり方によって、バリアフリーも、福祉制度も、人の支え合いも、コミュニティも、町づくりについても、様々な困難克服の方途について、本当に人の生き易さに繋がっていく途の試み、あるいは改善の歩みの前進になっていくことになる。

これが福祉次元におけるエンパワーやストレングスという語句を越えていくリカバーといえる本質への帰還のステップである。この回帰のなかにある本質を分析的に検証していくと、そこにおいては、社会的側面からの役割を探るためにその志向を方向づけるとともに、個的な福祉次元における相互関係性の共に生き会う志向の方向づけをも内包していることを知ることができる。総じて専門的見地において本質としてこの志向性を堅固に維持することによる本質的状況対応力の維持が可能になっていく、ということが出来る。それは愛の趨勢的動向として前述のシェーラーの認識に明瞭に表明されている内容でもある。究極における「神による愛によって人間愛の表出を可とする」、として意味付けられる福祉次元においては、そのプロセス内に人格論的実質を捉えていくことができる。

いうなれば、「世の光」として相互に人を人格的に見つめ、見えない人格に相互存在参与していくことによって、自己の内側に対して、他の存在性に対して、社会的存在性に対してとその共遂行ないし、それは相互包摂とも捉えることができるのであるが、その実質は世界に広がってゆく。この自我から人格にまで至る相互包摂の途が生きられることによって、そのことを告げ知らせ、照らし出すことができるのである。そこには前述のシェーラーが示した「精神的人格中枢一般が人間性の中に全体として存在し満ち溢れる」状況が志向のプロセスにその密度を高めながら存在することになる。

この「精神的人格中枢の充満」とは、人間存在にとっての本質存在のまさに神髄とされる状況である。それはまさに人格主体という統合性の作用化として、見えない動きのなかで顕現していく。しかしその本質は確実に自我段階から発して人格へと続く途において発見できる連続性の要にある軸芯そのものである。それ故にともいえようが、ここに達するには至難性を越え続けることが必須である。したがってこの途はその困難性故に飛翔の彼方としか受け止められない。この方向性が存立することは理解が可能であるとしても、その途は現実的な諸条件の元においては矛盾に満ちており、ことさら現実に照合するとそれは現実諸条件の個々とは連続性を保持することのない断絶の彼方にあるとしかいえないかもしれない。しかし福祉的実態においてはこの途に本質があるといえるのであり、その本質故に福祉実践はその存在理由を保持している。しかしそのプロセスではその困難性故に現状の波に押し流される事態に翻弄されているという事態にある。実態は本質を否定しきれないという理論上の言説がこの本質還元のささやかな杖となっているが限界を露呈することが多

い。それでも否定できない方向性は志向性の道標となっており、段階的な歩みは途切れながらも絶えることは無い。これは矛盾のありながら連続しているという実際の状況であり、見えない予想にしかすぎない現状において予想的に把握可能な位相的連関であったとしても、その理論上の方向性は、現実とその彼方が連続しているという実態を教えてくれる。そこには帰還を待つ本質への途がある。

この困難な途への帰還は、まさに福祉論にいう支援的対応におけるリカバーそのものであり、それを徹底していくときには、現社会事象についての根幹からの問い返しが求められることになる。それは、社会そのものの本質回帰を必須事項として内包している。単なる全ての希望を叶えるという過保護的方策でもなく、また経済状況の限界故の放置でもなく、人間と人間との社会と社会との、さらには国家同士の存在上の参与、共遂行の途の懸命なる模索のなかから導きだされる途がそこにある。

こうした原理上の考察に関わる事例項目についての列記された個々のなかにおいて、無数のトポスが存在し、内部的には、状況まさに述語に対する主語の自我機能が働き、さらにそれに統合的包摂として作用する人格主体が他との包摂的主体関係を形作る可能性を持ちながら存立していく。自我主体としての主語は、人格存在とその主体への存在参与の道をたどる可能性のもとにあるが、それは、上に述べてきた実践プロセスに照合して理解するとき、その人格上の実質に照らし、自我上の真なる論旨（論点）を明瞭にしていくことができるということが出来る。そこには包摂しながらまたされながら、包摂し合う間柄のなかで全体を包み込む、作用の核（われわれはこれをも論点と云うことができる）が相互に作用し合っている。方向性の明示のもとに自我と人格の相互包摂的な志向性が確認される。上に述べたように、トポスを間主観性との関連において捉えるときに、それは明瞭である<sup>(24)</sup>。

このように、トポスとは、層を形成しながらわれわれの部分世界に関わる様態の核であるといえる。述語的状态のなかにある間主観の条件としての事象に目を向け、その包括力と、自我次元の主語による包括力、さらに層をなす人格的次元における間主観の条件としての述語的包括力、また人格主体による包括力、それぞれに部分としてのトポスが存立する。それは必ずしも統括性を持つ核という形態を取るばかりではなく、散逸のかつ多様性を持つ場合もあろう、それはそれとして、多様性を持つ特性としてその位置づけを一定の態様における核として表現することができる。その総体として全体包括性をもってトポスということが出来る。さらにまたそうしたそれぞれの部分を構成するトポスが志向性のもとで成立していくと考えることができる。

トポスとは、その相互関係性、関わりを持ち合う存在の要諦にあり、まさにそれぞれの包摂体の中心点を意味しており、その中心の位置故に全体との関わりを持ち、それを包み込んでいると見ることが出来る。さらにいうならば主語—述語関係性を持ちながら存在する自我主体間さらにに人格主

体間の相互性における間主観性の関係性の核そのものと言えるのである。このようなトポスを現実事象の間主観性状況のなかで探求し、解明していくことにより、われわれは現実の事象の本質に段階的にたどり着くことができる。それにより、事象内の改善改革、福祉上の問題状況から離脱していく糸口に立つことができるのである。

ここでそのトポス状況と、それを存立させる根源たるトポスそのものを作用連関のもとに捉えると、そこには人間の存在とその相互的存在性を前提とする限りにおいてある上記してきた状況、すなわち位相的かつ換言するならば可逆的世界の様態とともに、その様態に発して統合性へ向かおうとする志向性が存在している。さらにその志向性が個的に分化された「自他未分化の体験流」との連関継続のもとに他我が自己に流れ込んでくるときに自我がそれと相互連関しながら形作る自我上の意識があり、これが統合性への道の個的特性を意識上に描いてゆくことになる。こうして志向性に特性が分化的に生じていくことになる。当然そこに個的特性を持った統合作用への存在参与が作用化されていくことになる。

このようにプロセスをたどってゆく途上であって、社会福祉の現場で実践に従事する専門人は、科学的客観的技法に言及し、個別的な特性に応じた技法の行使を求めることであろう。ここではその客観的技法を求め行使することを否定するのでもその効果に疑問を投げかけるでもなく、それを我々が明らかにしてきたトポス状況のなかでとらえ、そこにある志向の本質を説くりカバーへの道を企図することを求めるのみである。

客観的方途が客観的世界に沿って存在するならば、客観的事実が志向に先行し、意識以前に存在していなければならないが、ルイベン (Luijpen, W. A.) が解くように、客観的存立それも実在としてとらえるということであるならば、「客観的実存を考えること自体がその実存に関わっているということであり、」「われわれが意識の領域外にある客観的実在を問うがゆえに、起こる」ことである<sup>(25)</sup>。このようにみることのできる客観性とはどのような位置づけを与えられるであろうか。それは「事物自体の開放性」を意味している。「事実を隠蔽から引き出すのは意識の作用であり、その存在化作用によってである。」「意識とは……事物の能動的な開示である。」このような意識をルイベンは「邂逅」とも表現する。彼は現象学の立場に立って、「〈一切の知識はそれが主観に現れるような客観を表している〉のだから、〈一切の審理は主観的である。〉また〈一切の真理は相対的である〉という命題は、〈一切の真理は主観との関係を表現している。そしてその主観との関係のなかにおいては真理は絶対である〉という意味に解することができる。この認識のもとにルイベンはまさに「志向性」の存立そのものを意識とみるのであり、「志向性」とは「世界と意識との相互の包み合い」であるというクワントの発言を引用し重視している<sup>(26)</sup>。

ここでトポスという関係性の核の議論に戻ると、そのトポスが世界のある部分として意識に捉えられそれと絡まるときに、まさに統合性という外見上の言葉で捉えられる志向作用そのものでしか

ないことは明らかである。トポスとは一般性に発しながら、それを包摂し、さらに人格的統合へと到り、またさらに人格主体間と切り離すことができないそのさらなる上部からの統合性という包括力そのものとしての作用である。その作用力が場の所在状況であるトポス（核）という本質であることを明確に把握することができる。それが意識の内実によってさまざまな分化特性を示すとしても、それは本質においては統合性という作用として表現される。

このような作用と志向性、その分化特性を理解することによって、われわれは上記したように、多様な福祉上の実践の糸口に立って前方へと歩み出すことができる。こうして、われわれは対象化できないその人、人々の人格を念頭に置いて、その作用の作動へと向けた条件設定への旅立ちを許容されることになるのである。それは現実にある、或いは求められているトポス状況の解明という門を開くことによって開始される。それは包摂状況の解明であり、心理的側面は言うに及ばず、経済的、社会的ある場合には政治的等々のその人が置かれた場であり、またそれはさらに詳細にみると内的・外的広がりを持って包摂体にちりばめられて有機的に存立している。

われわれは、人間の存在におけるトポスを間主観的に解明することによって、その一見散逸して存在するとも見える諸条件の構成状況をトポスに向かって即ち人格統合性に向かって条件付けながら力動化する支援的な実践者という役割内容を獲得することができる。これは既に優れたワーカー（実践者）における実践上の在り方のなかに看取される在り方に過ぎない。ここに示される議論はその論理的堅固化を図る試みに過ぎない。

## 結章 福祉的人格主体論——エンパワーからリカバーへと進む主体

主体的高揚状況の多様な展開がなされるなかで、それぞれの間における相互包摂の関係が人間社会における個々から全体に到るトポスを作り上げていく。こうしたこれまでの議論の論点整理のもとで、「福祉的人格主体論」として内容総括できるまとめをしておく。まず静態的トポスとは、と問うておくと、それは論点（統合性）として把握可能である。それを論点足らしめる包摂体との相互関係こそトポスの本源態様であり、それを静態的トポスに対して動態的なトポスとすることができる。そのトポスの本源態様への作用同調（第10章の議論の展開で既に類推がなされ得たであろう）、それがまさにリカバーの道に他ならない。エンパワーという作用の発現、それを可とする基底的支えとしての端緒的ストレンクス、また作用継続のなかで形作られていく諸結果としての暫定的ストレンクス。それが流動状況のなかでエンパワーの構造的土台になる。社会福祉においてはこの作用連関の基軸的プロセスに絶えず立ち帰るというリカバーの継続が求められる。それが最終的に人間に焦点を当てその福祉状況の達成という目的性を持った施策、技術、さらにはその基底的理念として求められるのである。このプロセスとは、自我上の人格への道程を経て、またその人格主体との相互性を経て達成されていくことになる。そうして本質還元が福祉の実態となっていくことに

なる。このような形で、福祉の実践状況内という限定状況において、自我から人格主体への道を要約的に把握することができる。

これまでの説述をまとめ、自我論上の考察から人格主体論に至る考察の流れが矛盾なく理解されるように論を集約しておく。人格参与への条件設定としてのエンパワーないし潜在能力を発揮していく条件形成が、主体性への帰還、すなわちリカバーにつながることを再度確認し、自我主体が人格主体へ自己の内的存在性において存在参与し、同時に他我を通じて他の人格へも存在参与していくことを可とする。

はじめに、自我領域においてわれわれは人間の生を直接的に把握した。見て把握し科学的に分析可能な領域を身体との関連を追及しながらやや詳しく解明した。そこではシェラーの説く人間の環境世界内の生存が描かれた。それは客体として存立する人間の側面でしかない。これに対し、統一主体としてその統合作用のなかに包摂する人格領域が関わって人間の全体主体としての姿が存立する。これは人間の意識の持続的存在によって存立を許容されている。自我主体がこの意識的存在という脈絡を通じて人格主体の作用と関わることができるのは、そのプロセスを問うてゆくと、存在参与という自己並びに社会的共存在たる他我を理解することないし他我との邂逅によって、他我の人格と出会うことによるのみである。しかしこの関係性は決して線型的に進行することはない。むしろ位相的關係性及び可逆的進行のさまを思い描くことが妥当であろう。しかも作用としての捉えることのできるのみの人格とのかかわりである故に位相や可逆といっても、生きられてはじめて過去を捉えるにしか過ぎない内容を残すのみであるとしかしいようがない。

しかし、われわれはこの段階でこの「生きられるプロセス」を、少しく具体へ引き戻すことを必要とする。社会福祉という支援の技術や人間に焦点を当てた諸施策を駆使する領域において、単なる行為の核心となる主要な脈絡のみでなく、それを軸心としながらも、その主軸を堅持しつつもその生きられる方向への歩みを持続させる、すなわち志向の持続を可とする条件を整えることを瞬時、瞬時において緊務とするからである。

条件という言葉は、何かにとっての条件にほかならず、そこには明確な対象が確定されていなければ、条件設定の仕様がなない。もし、ここで予見されるように、方向性だけが明白であるが、条件設定の対象が明白でないならば、なしうる方途とは、方向を見定めた自我領域の身体条件に関わる諸事に関して形作る以外にないということになる。われわれがなしうるのは、このような主軸としての人格への志向性を念頭に置いたうえでの自我領域の諸条件を人格作動—高揚的に整えていくということのみである。したがって科学が作動しうるのは、この領域における条件設定に関わる対応のみであるといえる。このように考えてくると、その行為には絶対性を持つ証文は与えられない。それは試行のプロセスである。しかし、その試行プロセスの条件付けがなければ、身体条件の持続が保持できないという危機を拭い去ることができない。このようにして自我領域と人格領域とは関係性を持って生きられてはじめて現出する、生きられることで、どこかで連続する関係のプロセス

を形作っていくのである。それはどこからどこへと指し示すことはほとんど困難というほかないものの、志向の連続が実態としての両者の連続へと繋（つなぎ）を可能とする。

そのプロセスにおいて生きられた結果として、その具体的提示として先述してきたエンパワー（内発力発揮）からリカバー（帰還）への道が表現されていくことになる。——それはすなわち、意識の志向性の原点にある内発力と志向内容の相互連関を明らかにしていくことにより、事例的に何らかの結果が施行されるプロセスが表現されていくのみであり、それは何らかの事例ではあっても、人の存在と可能性の隠べいに終わるような意識の固定化ではないし、そうであってはならないことがケースの開始時において認識されていなければならない。すべては新鮮な関わりとその段階を経た継続から開始される。

そこに作用ないし働いている人間における意志（意識の志向性）は、意識的方向性が人格の統合力によって一定値をうるときに発揚されそれが内発力として作用を形作る。そのためにも精神の中核としての人格の統一作用への帰還（リカバー）が螺旋（らせん）的な形をもった高揚として意欲されるとともにまた平面的な広がりをも持って展開されていく。個々の位置は、位置的には同一の場にあるからである。

そこにおいては、すべての人にとっての生きられる世界の理想的優位性の回復（ルイベン）が求められる。この生きられる世界の回復とは、シェーラー流に自我領域と人格領域を区分するというならば、自我領域に発する身体条件の整備が、本能的動物の次元から離脱しその内に統合主体としての人格の作動が見られる次元に至る段階において人格主体にその主軸が移行するとみるのが妥当であろう。神の愛という人格次元の最高峰において作用する力でさえ、人間の自我意識が受け止めて初めて、その人間の内実態にとっての意味を持つ。自我と人格とは、自我上の現実からしか対象化することができない、しかし、たとえ自我的側面からは見えない状態であったとしても、その関係性を位相的に作用化して作用点を条件的には把握していくことができるのである。

これはきわめて日常的な人間意識と志向性についての論にすぎない。しかし、現在においては、ルイベンもいうように、科学的世界がありのままの日常経験にとって代わってしまっており、そのために、この位相的關係性が見えないがゆえに、忘却されてしまっている。

ルイベンの言う科学世界とは、上述の福祉理念を非現実的とする現実条件として顕現する事実の世界である。そこには社会的経済的事実の世界を起点にした人間把握における事実をも含むことになる。言うまでもなく人間そのものの対象化がそこにはあり、それが、人間理解に曲解を与えてしまう。ここには前述した本質と副次的の議論が想起されねばならない。社会的経済的事実が本質と取り違えられてはならない。それは副次的事実であり、本質へ至るための道程で考察をする必要性に迫られたとしても、それを克服する途が探られるなかで、あくまでも副次的に取り扱われねばならない。要は本質への途が忘却されてはならない。例え、現在的な不可能性があろうとも、段階的に限界点を取り除くためには、本質回帰のファクターが絶えず働き続けねばならない。

このプロセスを克服し、さらなる生きられる状況の高度化への志向性を作用化していくことが社会福祉の実践者や探究者には求められている。まさに人間として生きられる状況がリカバーされていく、そうした道の確実化がそこにはある。それが自我から人格主体への関わり合う道をたどる福祉実践の途であり、そのプロセスは、あるいはその軌跡における一瞬一瞬として、さらにはその瞬時の総体として、存在の場「トポス」が形成されていくのである。

この論を閉じるにあたり、われわれは、これも前述したホワイトヘッドのプロセス理論や有機体哲学を批判的にはあつたとしても、本論とかかかわらしめて、改めて別項にて論じる必要を感じている。人間世界におけるトポスの展開——福祉的人格主体論の展開においては、その有機性の内にある接合的論理が極めて有効となろう。紙幅の限界故にそれは次稿の課題としたい。

トポスは限界的な相互包摂体としてのみならず、連続する世界において開放性のなかにさらに越え出ていく作用の中に形成されていく。そこに主体が作用し続ける限りにおいて、その個々における自我存在からの世界開放的存立の本質は止むことが無い。その軌跡は人間の学における本質還元の続行に支えられるといえるのである。

#### 注

- (1) Chapin, Rosemary k., *Social Policy for Effective Practice, A Strengths Approach*, (second ed.) Routledge, 2011, pp. 9-10.
- (2) *ibid.* pp. 13-15.
- (3) *ibid.* p. 13.
- (4) 飯島宗享・小倉志祥・吉沢伝三郎編、吉沢伝三郎・岡田紀子訳、「倫理学における形式主義と実質的価値論理学(中)」(シェーラー著作集2)白水社、2002年、287-288頁。
- (5) *op. cit.*, *Social Policy for Effective Practice, A Strengths Approach*, p. 248.
- (6) Kate Warren は、アンソニー (Anthony, W) のリカバリーの定義付け (1993) を取り上げて、「人の態度、価値観、感情、目標、技能や役割を変容させる非常に人間的でユニークなプロセスである」という発言を評価的に引用しつつ、それが、病による状況であったとしても「満足、希望また条件力のある人生の道である」としている。リカバリーとは、まさに精神的な病に大きな影響を越えて人が成長を遂げる「人そのものの側における新たな意味や目的の発揚を包含している」とワレンは位置づけるのである。さらにアンソニーに言及し、彼が精神保健体系を方向付けるリカバリーの展開における基礎的諸原理を明確にしているとする。それは、そのプロセスにおいて病それ自身からの回復を含むのみならず。精神的な病に起因する複合的な影響や損失からの回復をも包含する。それにはスティグマ、差別、等々からの社会的除外といった状況からの回復をも含まれる。そうして、精神保健上の問題が、社会的障害の形成、貧困、失業、社会的孤立の明らかな存在とも関係するとも強調している、とする。(Warren, K., *Social work monographs: Exploring the Concept of Recovery from the perspective of People with Mental Health Problems*, *Social work monographs*, (monograph 198) Norwich, 2003, 15)
- (7) Velleman, R., Davis, E., Smith, G. and Drage, M. (ed.), *Changing Outcomes in Psychosis Collaborative Cases from User's Carers and Practitioners*, BPS Blackwell, 2007, pp. 7-10.
- (8) Rapp, Charles A. & Goscha, Richard J., *The Strengths Model -A Recovery-Oriented Approach to mental Health Services.*, (3<sup>rd</sup> ed.), Oxford 2012, pp. 14-15. 本稿においては当該原著を定本にして考察をしたが、本著については田中英樹監訳「ストレンクスモデル」金剛出版、2014年が出版されて

おり参照させて頂いたが、本論においては独自の理解に基づき、訳語等に就いても本論の基軸に添って位置づけている。

- (9) *ibid.*, p15-16.
- (10) *ibid.*, p. 15.
- (11) *op. cit.*, Changing outcomes in Psychosis Collaborative Cases from Users, Carers and Practitioners, p. 9.
- (12) *op. cit.*, The Strengths Model, pp. 22-26.
- (13) Etzioni, Amitai. The Third Way to a Good Society, demos, 2000., pp. 16-18.
- (14) *op. cit.*, Social work monographs, Norwich, におけるワレンの見解も、多くのリカバーに関する論者の見解を引きながら、リカバリープロセスにおける自らの状況の受容や希望を持ち続けることの重視を経ながら、プロセスに注視していこうとしている。またさらにプロセスにおけるエンパワメントが自身の良き状態へ向かうコントロールや責任の感覚の獲得と緊密に関係しているとも述べている。(17, 18, 19)
- (15) *op. cit.*, The Strengths Model, p. 22.
- (16) *ibid.*, p. 25.
- (17) *ibid.*, p. 26.
- (18) 牛津信忠「自我論と人格主体論の現象学的再考 [第三部(1)] 聖学院大学論叢第27巻第1号87頁。
- (19) 上掲論考 [第二部(2)] 第7章を参照。
- (20) 柏木昭・佐々木敏明「ソーシャルワーク協働の思想」——“クリネー”から“トポス”へ」ヘルス出版, 2010年。

この論においては、単なる空間的次元の場が念頭に置かれているかに誤解される向きもあるが、決してそうではない。そこに込められた意味には、クリネーからの断絶なき連続性を持ちながら関係性が場として捉えられていることから理解できるように、それは人間の内的時間の世界を十分に考慮におきながら、いわゆる物理的時間性という計られうる空間的時間をそれに包摂していく興行を内包している論であるといえる。
- (21) Merleau-Ponty, Maurice, *Le Visible et L'invisible suivi de notes de travail*, Éditions Gallimard, 1964, 滝浦静雄・木田元訳「見えるものと見えないもの」みすず書房, 1989年, 303頁。
- (22) 前掲, 柏木昭・佐々木敏明「ソーシャルワーク協働の思想」87-88頁。
- (23) 1914-1968, 知的障害者施設「近江学園」, 重症心身障害児施設「びわこ学園」創設。
- (24) 間主観の理解の範囲内における自他未分化の体験流と述語的世界の繋がりについて一言しておく。両方とも一般化の世界に他ならない。そこからの分化、特殊化によるといえる主語の発生から自我主体へと展開は進んでゆく。主語的存立体とは自我主体の世界、さらにその人格への飛翔としての存在参与、出会いの連続、対話の世界、それから人格主体的存立へ繋がる。この相互関係性における主体間の状況を間主観と呼ぶことができる。そこにおいて個々に働く、或いは作用している論点を、トポスと言うことができる。したがって、それは、述語的世界に作用していく、次第にその作用を明確にし、作用的高度化をたどっていく統合力としての核という理解が可能である。これの作用する場がトポス状況そのものである。
- (25) Luijpen, W. A. *Phenomenology and Humanism*, Duquesne University press, 1966, 菊川忠夫・丸山敦子訳「現象学と人間の回復」イザラ書房, 1978年, 34-35頁。
- (26) 同訳書36頁。

Phenomenological Reconsideration from Ego Theory  
to Personal Identity Theory :  
Enhancement Consideration Hinging on View of Social Welfare Part III (2)

Nobutada USHIZU

In Part III, generally, we discuss the interdependent inclusion of ego and personal identity and the development of intentional consciousness toward subjectization in accordance with welfare reality. Thereby, we try to clarify welfare theory based on the topological continuity of ego and personality which results from topos formation.

In Chapter 10, we will develop the argument on personal social welfare and social policy in the domain of an ideal type, but more concretely. Through such consideration, we identify each stage of inter-subjectivity, i. e., the stages of ego, personal identity and, furthermore, “Secret personality” (Schiller’s phrase) merging into higher identity, and clarify the interdependent intentional inclusion of ego and personality.

In the last chapter, we integrate our argument on topos formation in the human world with the theory of personal welfare identity. Thereby, the true figure of the human subject, which progresses to essential return through empowerment and recovery, etc., is reconfirmed.

---

**Key words:** empower, recover, integrate, continuity, inter-subjectivity, topos